
懐中時計とナイフ

天窪 雪路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

懷中時計とナイフ

【Nコード】

N8655P

【作者名】

天窪 雪路

【あらすじ】

ドアを開けると実に清々しい風が吹いた。嗅ぎ慣れたこの風の香ともお別れなのだ。

計画していたとはいえ、別れとなると寂しくなるものだ。

胸一杯に風の香を吸い込むと、肩に提げたカバンを気持ちの良い位置へと提げ直し、ここからしばらく先の駅へと向かった。

それが夢であったと分かってから、僕はやはり現実の有り様にひとしきり失望し、それに納得するだけ納得すると、ようやく重い腰を上げた。父のわずかに遺した銀色の懐中時計と研きこまれたナイフとを鞆に詰め込み、僕は失望とともに、何の魅力も持たなくなったこの故郷に別れを告げることにした。

急に思い立った訳ではない。最後の肉親である父の病状が悪化し、彼の命が救うことのできないそれであると判明してから、僕は以来数年の歳月をかけてこれから始める旅の計画を練っていたのだ。

ドアを開けると実に清々しい風が吹いた。嗅ぎ慣れたこの風の香ともお別れなのだ。計画していたとはいえ、別れとなると寂しくなるものだ。胸一杯に風の香を吸い込むと、肩に提げたカバンを気持ちの良い位置へと提げ直し、ここからしばらく先の駅へと向かった。

駅に着くと少年とその母親が汽車を待っていた。どうやら同じ汽車に乗るようだが、だとすればあと30分間は汽車の到着を待たねばならなかった。

「ママ、汽車はまだ来ないの？ ぼく、待ちくたびれちゃったよ」

「そうね、もう少しよ。さっき駅員さんから聞いたでしょ？ あと30分間よ」

「もう少し、もう少しって、ママはさっきから同じことばかり繰り返しているよ」

「そうね、ごめんなさいね。ママが悪かったわ」

「ねえ、ママ、もうダメだよ、喉が渴いて仕方ないよ」

「りんごがあるわ。りんごを食べてあと30分間だけがんばりましよう?」

何てことのない親子の会話であった。しばらくここで汽車を待っているようで、少年が待ちくたびれてぐずり始めたのだ。

「りんご、食べる。ねえ、ママ、皮を?いてちょうだい」

「そのままかじるのよ?ここはお家じゃないんだから」

「いやだよ、皮を?いてくれないと食べれないよ」

そんな親子のやり取りを聞いて、僕は母親を気の毒に思った。小さな子を連れて汽車の到着を待つだけでも大変なのに、その上、ぐずり始めて無理な注文を突き付けられ、困っているだろう。

僕はその親子に近づき、こう申し出た。

「こんにちは。もしお手伝いできるなら、僕がりんごの皮を?きましようか?」

親子は初めこそ用心を見せたが、僕が怪しい類の人間ではないだろうことが分かってから、

「すみません、お願いできますか?」

と母親が言った。

僕はカバンから父の形見の一つであるナイフを取り出し、慣れた手つきでりんごの皮を？いていった。

家族を失ってからというもの、りんごの皮？きくらい朝飯前なのだ。

「はい、どうぞ。ちゃんとお母さんにもあげるんだよ？」

少年は幾つかに切り分けられたりんごを手にとると、

「うん！ママ、はいどうぞ」

と言って母親にりんごを差し出した。

汽車に揺られながら外の景色を見た。街は既に闇に染まりつつあった。

ところどころに灯りが見えるが、汽車の騒音が景色のずっと向こう側の人々の生活を余計に静かなものであるように感じさせた。

汽車には様々な乗客があった。待合室で出会った親子の他に、身分の良さそうな紳士もいたし、旅行中の身なのであろうか、僕と似たような格好をした若者たちの姿もあった。誰もが何かのためにこの汽車に乗り、誰もがその目的のために、やがて到着する駅で汽車を降りるのだ。

僕は車内では誰とも話さなかった。これから待ち受けるであろう旅先での運命に思いを馳せながら、やはりぼんやりと外の景色を眺め、汽車に揺られていた。

汽車はムスペルヘイムに到着した。乗客たちは長い時間に渡って汽車に揺られていたために、皆降車すると一様に背伸びをした。

ムスペルヘイムは伯父の住む街であった。
父が生前、

「父さんが死んだら、ムスペルヘイムの伯父を訊ねるといい。スルトという腕の良い鍛冶屋を訊ねてまわれればすぐに会えるだろう」

と言っていたのだ。伯父とはこれまで一度たりとも会ったことはない。父が死んだとはいえ、それで伯父を頼りにするというのは何とも心苦しい感じがした。かつて鉱山で鉱脈を掘り当て、一夜にして大富豪になった家族があったが、同時に一夜にして知人が倍にも増えていたのを何となく思い出した。

伯父を訊ねるついでに、ちょうど昼食をとれる店をまわってみた。ムスペルヘイムは豊富な鉱山資源で栄えた街であった。ゆえに鉱山で働く男たちが多く、昼食の休憩をとる男たちも見ることからに屈強そうな者たちばかりであった。

「てめえが悪いんだろうが！のされる前に出て行けや！」

昼食を食べていると、突然店内からそんな怒号が聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8655p/>

懐中時計とナイフ

2011年1月9日05時18分発行